

高鍋町教育研究所

I	研究主題及び副題	1-2-1
II	主題設定の理由	1-2-1
III	研究の目標	1-2-1
IV	研究仮説	1-2-1
V	研究の全体構想	1-2-2
VI	研究組織	1-2-2
VII	研究の実際	1-2-3
1	防災教育の充実	1-2-3
(1)	防災教育の指導計画と実践化	1-2-3
(2)	防災や減災に関する研修	1-2-3
2	防災学習の視点を取り入れた授業実践	1-2-4
(1)	小学校における実践（理科）高鍋西小学校6年生	1-2-4
(2)	中学校における実践（学級活動）高鍋東中学校1年生	1-2-5
3	防災訓練等の充実	1-2-6
(1)	「学校防災の日」の取組	1-2-6
(2)	合同避難訓練に関する会議	1-2-6
(3)	合同避難訓練	1-2-6
4	学習環境整備	1-2-7
(1)	家庭や地域と連携した取組	1-2-7
(2)	アンケート調査	1-2-8
		1-2-9
VIII	研究の成果と課題	1-2-10
1	研究の成果	1-2-10
2	今後の課題	1-2-10

【引用・参考文献】

【研究同人】

I 研究主題及び副題

地震・津波災害から命を守り、たくましく生きる児童生徒の育成
～防災教育の指導計画の実践を効果的に進め、主体的に行動する力を育てる指導を目指して～

II 主題設定の理由

東日本大震災後、地震・津波災害から子どもたちの命を守るための防災教育は課題となった。その中、防災教育で多くの子どもたちの命が救われた岩手県釜石市の事例は貴重な教訓となった。また、県教職員被災地派遣事業で宮城県山元町へ派遣された町内の職員の報告は、地震・津波災害から命を守ることの厳しさを伝え、防災教育は「生き抜く力」を育てるものだと痛感させた。

宮崎県危機管理課は、南海トラフ大地震が発生した場合の本県被害想定を発表した。高鍋町の被害想定は、死者1,000名など大変厳しいものだった。町は災害対策として、施設面の整備や防災訓練を実施し、「みんなの防災手帳」や「津波ハザードマップ」の活用を働きかけた。

各学校では、防災マニュアルや防災教育年間指導計画を見直し、避難行動を検討したり町の関係機関やボランティア団体の協力を得たりして避難訓練を実施した。また、児童生徒が家庭や地域で被災することを想定し、「状況に応じて自ら考え、判断し、主体的に行動する力」を育てることを目指して指導を進めてきた。

本研究所では、平成25年度から小・中学校連携による防災教育を推進するための実践的研究に取り組んだ。各学校の「防災マニュアル及び防災教育年間指導計画」を対照し、防災教育年間計画一覧表を作成し、研究授業による検証を行って防災教育の全体計画を構想した。

平成26年度は、「高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書」を作成し指導計画の充実を図り共通実践するための資料とした。また、「学校防災の日」を設定し、広報活動で「防災教育の内容」を紹介したり「家族防災会議資料」を作成し「家族防災会議」の実施を勧めたりした。

平成27年度は、指導計画の実践化を図り、一人ひとりの児童生徒の防災意識を高め、防災につながる行動力を育てるために、全児童生徒及び教職員のアンケート調査を実施して、防災意識の傾向を把握し授業や避難訓練に生かすことにした。そこで、「地震・津波災害から命を守り、たくましく生きる児童生徒の育成」を本主題に「防災教育の指導計画の実践を効果的に進め、主体的に行動する力を育てる指導を目指して」を副題に設定した。

III 研究の目標

地震・津波災害を中心とする防災教育の指導計画の実践を効果的に進め、自ら危険を回避し、自他の命を守ろうとする意志をもって、たくましく生き抜く児童生徒を育成する。

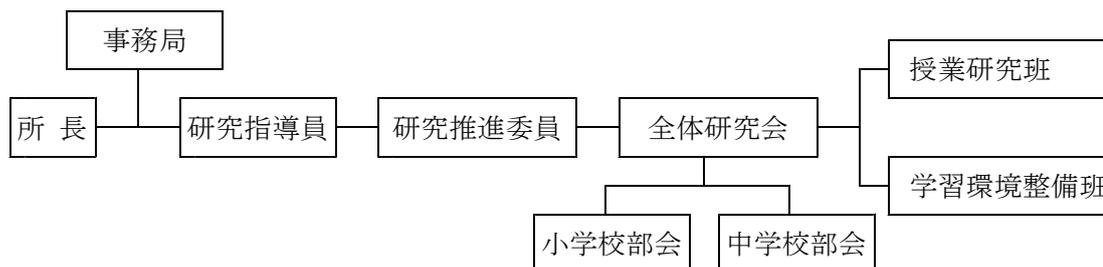
IV 研究仮説

- 1 「学校防災マニュアル及び防災教育年間指導計画」や「高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書」の実践に効果的に取り組み、小・中学校で連携して学ぶ体制づくりを進め、発達段階に応じた指導を工夫すれば、状況に応じて自ら考え、判断し、主体的に行動する児童生徒を育てることができるだろう。
- 2 防災や減災の学習環境を整備し、防災訓練等を通して防災体制をより徹底するとともに学校・家庭・地域・関係機関が連携し、日常生活の中で一人ひとりの児童生徒の防災意識を高め、防災につながる行動力を育てることで、自ら危険を回避し、自他の命を守ろうとする意志とたくましく生き抜く力を身につけることができるだろう。

V 研究の全体構想



VI 研究組織



Ⅶ 研究の実際

1 防災教育の充実

(1) 防災教育の指導計画と実践化

ア 平成25年度の取組

- 防災教育年間計画一覧表及び防災教育の全体計画の作成

イ 平成26年度の取組

- 高鍋町小・中学校の防災教育の手引き書の作成—地震・津波災害を中心として—

- ・ 全体構想図、各教科や総合的な学習の時間の指導計画、道徳及び特別活動の実践例

ウ 平成27年度の取組

- 教職員の研修による指導計画の共通理解と共通実践

- ・ 授業や避難訓練の充実を図る取組
- ・ 広報活動等による家庭や地域と連携した取組
- ・ 全児童生徒及び教職員のアンケート調査結果の活用

高鍋小・中学校の防災教育の全体構想図



(2) 防災や減災に関する研修

ア 高鍋町総務課の出前講座「高鍋町の防災対策」

- 7月1日に「研究員として、町の防災について理解を深めるとともに他の教職員へ研修内容を広めて指導の充実を図る。」を目的として実施した。
- 講話内容の「地震・津波被害対策」は、南海トラフから日向灘沖までの巨大地震の被害想定に対して「主体的な避難行動の徹底」「避難行動を促す情報の確実な伝達」「より安全な避難場所の確保」「主体的な行動をとる姿勢を醸成する防災教育の推進」について具体的な取組をもとにするものであった。
- 協議内容は、「津波避難ビルの指定」「防災訓練への参加状況」「大地震発生時の警報」などの情報交換であった。

イ 高鍋町小・中学校教育職員研修会の研究内容の発表

- 8月3日に「本研究所の防災教育に関する取組を発表し、教職員の理解を深めるとともに指導の充実を図る。」を目的として実施した。
- 発表内容は、平成26年度から平成27年度当初の研究主題及び副題に沿ったもので、防災教育の指導計画の説明をした後に研究実践について丁寧に述べ分かりやすいものとなった。また、宮城県山元町で体験したことや研修したことにふれながら発表を進めたので、被災地の教職員の考える防災教育についても学ぶことができた。

2 防災学習の視点を取り入れた授業実践

(1) 小学校における実践（理科）高鍋西小学校6年生

ア 単元名 地震や火山活動からくらしを守る

イ 本時の目標

- 地震や津波発生への備えを学習し、災害の種類に対する様々な備え、緊急地震速報やハザードマップなどについて理解することを通して、地震や津波による災害からくらしを守る意識を高めることができるようにする。（自然事象への知識・理解及び関心・意欲・態度）

ウ 防災学習の視点

- 災害の種類に対する様々な備え、緊急地震速報やハザードマップなどの内容を理解して、地震や津波による災害からくらしを守る意識を高める。
- 理科の学習であるという観点に立って、科学的な理解と合理的な思考・判断が必要であることを児童に理解させる。
- 自分たちの住んでいる地域ではどのような災害が起こる可能性があるのか、その際はどこに避難すればよいのか、何が 필요한のかを考えさせる。



エ 指導過程と児童の実際の様子

- 導入の前時までの学習を振り返る部分では、地震発生時の具体的内容を想起させたが、学習問題を先に提示することで、既習事項の想起がスムーズに進行した。
- 地震が起きたときのために備えや発生時の行動について話し合う部分では、これまでの避難訓練での指導が十分に定着していることが児童の発表内容の「家族防災会議」「避難場所の確認」「家具の固定」「非常食の準備」などから明らかとなった。
- 津波に対する備えや発生時の行動について話し合う部分では、津波が押し寄せたときの実際の画像を示したり津波発生仕組みについて水槽を使った演示実験で分かりやすく示したりすることで津波発生の科学的メカニズムの実感的理解を促すことができた。
- グループで話し合う場面を2ヶ所設けたが、いずれの場面でも児童は真剣に話し合いをすることができていた。話し合い、発表をスムーズに進めるために司会者と発表者をその場で指名、兼任させて進めさせたが、効率的に進めることができていた。



オ 考察

- 授業のまとめは、普段（日頃）の備え、実際に地震が起きた時の備えや心構えについて大事だと思ったことを文にまとめさせワークシートに書かせた。内容はどの児童もおおむね目標を達成することができていると判断してよい内容であった。これまでに学習したことを自分なりによく理解できているとともに、本時の目標に即したレベルの高いものを書いている児童も多かった。
- 児童は十分理解できているので、今後は実践化と習慣化をいかに養うかが課題である。また、児童がそれぞれの家庭の状況に応じて実践できるようにすることも必要である。

(2) 中学校における実践（学級活動）高鍋東中学校 1 年生

ア 題材名 災害被害を防ぐ、減らすためには

イ 本時の目標

- 災害による被害を最小限にするために、自助・共助の考え方を身につける。

ウ 防災学習の視点

- 日頃の備えが自助・共助に相当することを理解させる。
- 緊急地震速報が鳴り、地震の揺れに耐え、教室から東小学校屋上へ避難するまでの場面をイメージさせ、自助・共助について具体的に考えさせる。
- 家庭にいるときの自助・共助について考えるきっかけをつくる。

エ 指導過程と生徒の実際の様子

- 地震・津波に対してどのような備えをしているか、数名の生徒に発表させた。防災グッズの準備や避難場所を決めているなど各家庭の取組を知らせるとともに、日頃の備えが自助や共助にあたることを確認できた。また、生徒は自助・共助という用語そのものを知らなかったため、ワークシートに書かせることで理解を図った。

- 地震が発生し、津波襲来に備えて東小学校屋上に避難するまでの自助・共助について考えさせたが、その際、場面を分担し考えを深められるようにした。自助については、これまでの防災訓練の経験から「机の下に隠れる」など考えることができた。一方、共助については、地域の方など他に避難してくる方の存在を明らかにすることで思いつく生徒が多かった。また、南海トラフを震源とした場合の高鍋町の被害予想を知っている生徒が少なく、危機感を持たせるために確認した。



- 自助・共助について、班の考えをまとめる場面では、進行係など予め役割を知らせることで自覚を持って取り組ませた。全員に考えを出させること、記録させることで互いの考えを真剣に聞き合いながら班の意見をまとめることができた。特に印象的だったことは、「落ち着く」など気持ちの面まで考えていた班が多く、自他の身を守る行動と併せて大切なことだとまとめることができた。最後に、班活動の内容を踏まえて個人でもう一度避難の際の自助と共助について考えさせ、一層考えを深めさせることができた。



オ 考察

- 場面を分けたことと班活動で意見を交換することで、生徒の視点でより幅広く自助と共助を考えることができ、その内容をもとにして各々がしっかりと考え、災害発生時の自助と共助の考え方を身に付けることができた。
- 後日実施された地震・津波発生を想定した合同避難訓練では、緊急地震速報が流れた際に「地震が来る」「机に隠れよう」などの声を発する生徒はいなかった。職員が教室にいる状況だったこともあると思うが、授業で考えた自助や共助を実践できるような働きかけを行う必要があると感じた。また、町の被害予想の周知や家庭の備えを充実させることなどにも、継続して取り組む必要があると感じた。

3 防災訓練等の充実

(1) 「学校防災の日」の取組

本研究所では、過去に大きな自然災害が発生した9月1日、1月17日、3月11日を「学校防災の日」として町内4校共通で設定し、共通実践として「ミニ防災訓練」を実施することとした。その内容は、朝の会などで校内放送を利用して緊急地震速報と地震の揺れの効果音を放送し、児童生徒及び職員が机の下に入るなどの避難行動をしてきた。その際に使用する効果音のCDは本研究所で作成したものを配付し、活用してきた。昨年度後半から取り組んできたことで4校とも定着してきた。

(2) 合同避難訓練に関する会議

ア 合同避難訓練実施に向けて

昨年度の研究を進める中、町教務主任会の提案で小・中学校合同避難訓練の日程が設定された。また、今年度に入り、町教育委員会並びに町小中学校長会の主催で合同避難訓練を行うことを決め、学校防災主任会で詳細な計画や内容の検討に入った。当初の計画では、合同避難訓練において、東区（高鍋東小・中学校）西区（高鍋西小・中学校）の4校での合同避難訓練実施を考えていたが、近隣の幼稚園、保育園の要望もあり、東区（高鍋幼稚園、わかば保育園）、西区（ももの木保育園、なでしこ保育園）を含めた幼保小中合同避難訓練実施が計画された。

イ 高鍋町関係機関との連携

町総務課危機管理担当では、平成27年2月に「津波ハザードマップ」「洪水ハザードマップ」を作成し、町内全世帯に配付した。このハザードマップは、津波に関する基礎知識を得ることができ、津波に備えて、指定避難場所や避難経路を事前に学習するのに大変有効であった。また、町総務課の提言を受けて町教育総務課及び町教育委員会では、津波被害を想定して避難場所の見直しを行った。昨年度までの最終避難場所「高鍋農業高等学校第2グラウンド」への一斉避難から、小・中学校の耐震補強工事が完了したことなどにより、高鍋東小・中学校では、高鍋東小学校屋上、高鍋西小・中学校では、それぞれの学校の屋上を一次避難場所とした。

合同避難訓練の計画の実践にあたっては、学校・幼稚園・保育園と町教育総務課・本研究所とが連携して進めていった。初めての試みであるので事前の打ち合わせを十分行うことで訓練に備えた。また、町教育総務課の協力を得ることで、事前の広報活動や当日の道路使用許可などもスムーズに行うことができた。

(3) 合同避難訓練

ア 合同避難訓練の趣旨より

大地震（震度7）の発生を想定し、高鍋町の教育関係機関が合同で実施する地震・津波避難訓練とする。各教育関係機関で、同日・同時間帯に避難訓練を実施することにより、参加者それぞれの「状況に応じて自ら考え、判断し、主体的に行動できる力」を育てる機会とする。

参加者が合同避難訓練を通して、防災や減災の避難訓練の在り方を学ぶとともに、日頃から防災意識を高め、災害から命を守り、たくましく生き抜く力を身に付ける機会とする。

イ 実際の訓練の様子

当日は、雨天であったために参加できなかった幼稚園、保育園があったが、それでも事前に避難場所の下見に園関係者が訪れるなど来年度以降の計画に向けても有意義であった。



【校舎屋上への垂直避難】

4 学習環境整備

(1) 家庭や地域と連携した取組

ア 「ふるさと学習通信」発行

○ 目的

本研究所では、研究内容や取組を各家庭や地域へ広く知らせるために、町内小中学校の児童生徒の全家庭へ向けて「ふるさと学習通信」を配布する。地震・津波災害を中心とした防災教育の研究実践についての広報とする。

○ 内容

この通信の具体的な掲載内容は、次のとおりであった。町内小中学校で実施した研究授業や合同避難訓練の様子を紹介した。

また、「家族防災会議」に向けた資料を掲載し、家族防災会議の必要性を説いて、各家庭での実施を勧めたり、アンケート調査結果を分析して、児童生徒の防災に対する意識等について知らせ、参考資料としてまとめたりした。

○ 発行方法

研究会の中で、掲載内容を決め、原稿の作成や校正を進めて、11月から2月まで毎月1回発行した。

イ 家族防災会議の勧め

○ 目的

地震・津波の発生に備えて防災意識の高揚を図るとともに、児童生徒が家庭や地域で被災することを想定し、災害から自らの命を守り家族が無事に避難することを目指し、家族で防災について話し合うためのきっかけとする。

○ 内容

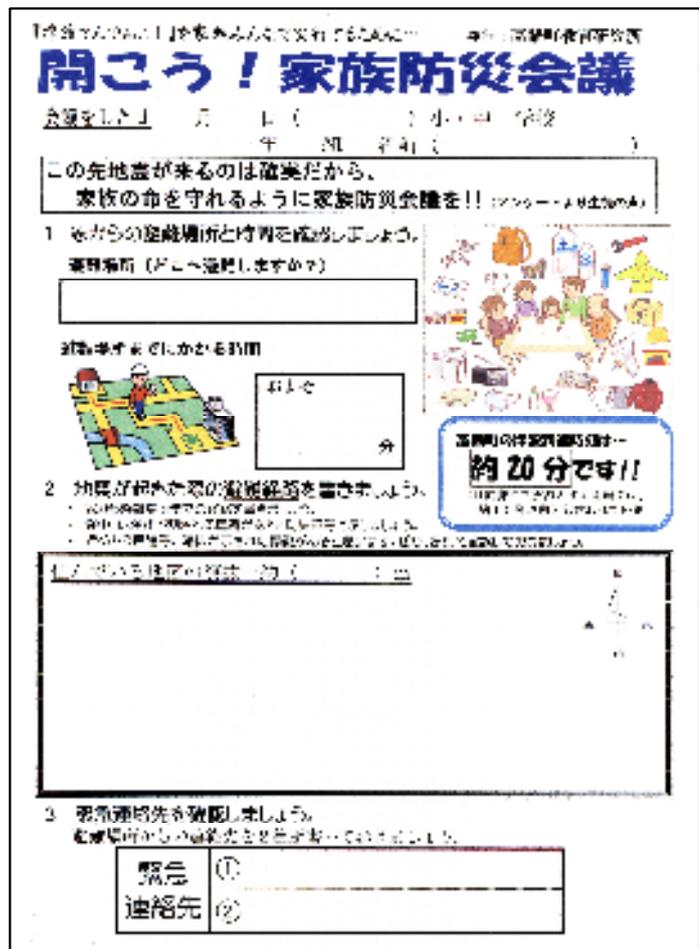
昨年度作成した家族防災会議資料をもとに、児童生徒の立場から見直しを進め、掲載内容を整理した。地震が起きた際の①避難場所、避難場所へ到着するまでにかかる時間、②避難経路、③緊急連絡先について話し合い、まとめるものとした。

○ 配布方法と利用

高鍋町小中学校PTA研修会の発表内容の一つとして家族防災会議の実施を勧めた。

町内の各学校より資料を1月に配布し、ふるさと学習通信の内容で家族防災会議の進め方を説明した。

記入した用紙は、各家庭内の見えやすい場所へ掲示し、万が一の被災の時は、資料を携行していくことを勧めた。



(2) アンケート調査

ア 目的

町内小・中学校4校の全児童生徒・教職員に、防災教育アンケート（地震・津波災害）を実施することで、2年前のアンケートを基に本研究所で取り組んできた研究内容を確認し、その問題点や課題を把握し研究に生かしていくことを目的とする。

イ 調査概要

○ 対象

- ・児童生徒…高鍋東小学校・高鍋西小学校1～6年全学級児童 1047名
(全児童 1098名)
高鍋東中学校・高鍋西中学校1～3年全学級生徒 558名
(全生徒 586名)
- ・教職員…高鍋東小学校・高鍋西小学校教職員 58名 (全職員 78名)
高鍋東中学校・高鍋西中学校教職員 51名 (全職員 65名)

○ 調査時期

児童生徒…10月下旬 教職員…10月下旬

ウ 調査内容

○ 児童生徒

「地震が起き津波が来そうな時、高鍋町内でより安全な場所を知っていますか。」
「家族防災会議を行って、地震が起きた時の避難場所（津波避難ビル）を決めていますか。」他6項目と「地震や津波から自分の命を守るために、何が一番大切だと思いますか。」という内容で自由記述欄を設けた。

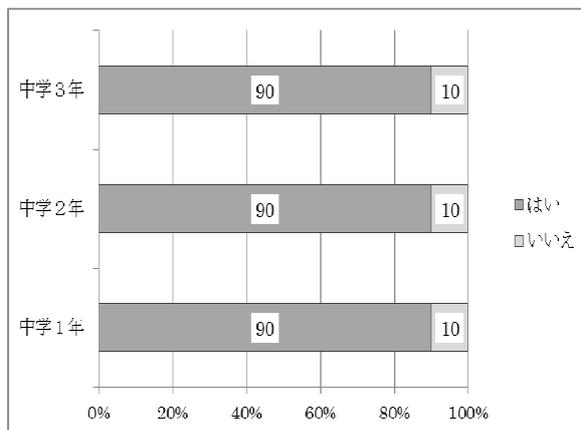
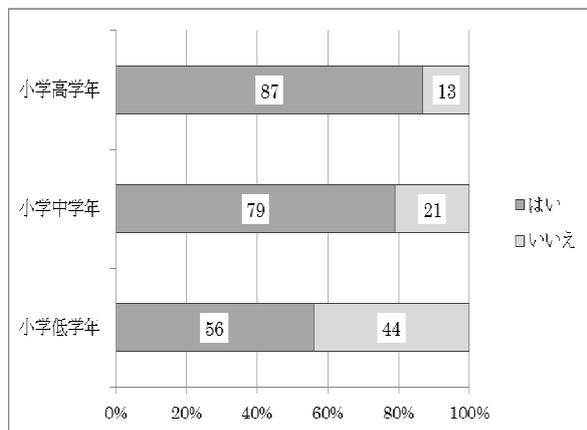
○ 教職員

「以前に比べて、ご自身の防災に関する意識が高まりましたか。」「児童生徒の安否確認や保護者への連絡体制は緊急時に対応できますか。」他5項目と「地震や津波から自分の命を守るために、何が一番大切だと思いますか。」という内容で自由記述欄を設けた。

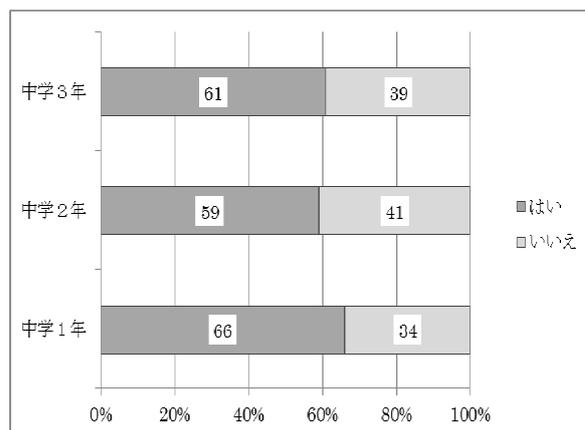
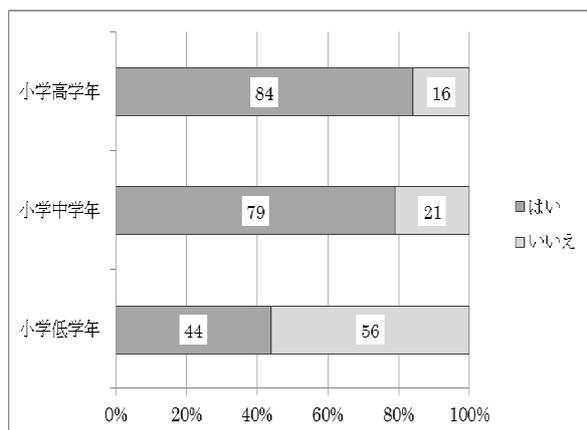
エ 調査結果

○ 児童生徒

「地震が起き津波が来そうな時、高鍋町内でより安全な場所を知っていますか。」

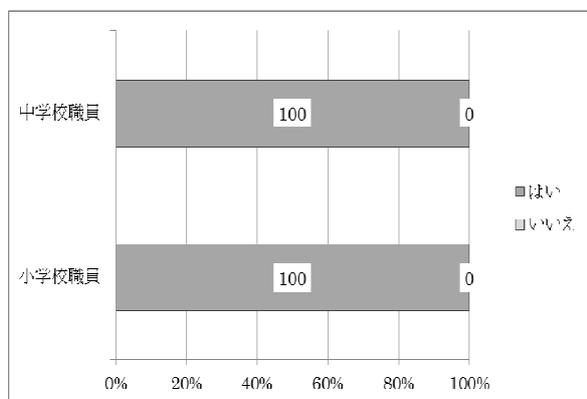


「家族防災会議を行って、地震が起きた時の避難場所（津波避難ビル）を決めていますか。」

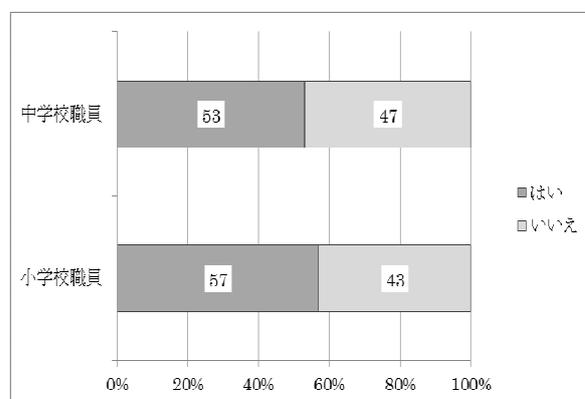


○ 教職員

「以前に比べて、ご自身の防災に関する意識が高まりましたか。」



「児童生徒の安否確認や保護者への連絡体制は緊急時に対応できますか。」



オ 考察

「地震が起き津波が来そうなとき、高鍋町内でより安全な場所を知っていますか。」の質問には、中学校1年から3年では90%、小学校高学年では87%、小学校中学年では79%、小学校低学年では56%の児童生徒が知っていると答えた。これは学年が上がるごとに避難場所についての知識が定着していると考えられる。しかし、「家族防災会議を行って、地震が起きた時の避難場所（津波避難ビル）を決めていますか。」の質問には、小学校低学年では44%、小学校中学年では79%、小学校高学年では84%、中学校1年から3年では60%近くの児童生徒が決めていると答えた。これは家族防災会議の実施が小学校では学年が上がるに従って実行されていると考えられるが、中学校では、4割近くの家庭で、避難場所についての話し合いや確認が出来ていないという結果が出た。これらの結果から、発達段階に合わせた避難の仕方を指導することの重要性とともに、保護者にも児童生徒と地震・津波について話し合うようにさらに家族防災会議の重要性を啓発していかなければならないことが分かる。町内4校の教職員のうち、「以前に比べて、ご自身の防災に関する意識が高まりましたか。」の質問には全ての教職員が「意識が高まった。」という回答が得られた。「児童生徒の安否確認や保護者への連絡体制は緊急時に対応できますか。」の質問には55%の職員が「はい」と答えている一方、45%の職員が「いいえ」と答え、緊急時の対応に不安を感じている。これは教職員の防災意識の高さが伺えるとともに、さらなる避難訓練の充実と防災教育の研修が望まれることが分かった。

Ⅷ 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 防災教育3年間の総括をすることができた。児童生徒、教職員の防災に関する意識が高まり、防災や減災に関する研修で県や町の防災関係機関とのつながりをもてたことは意義深い。町の出前講座の講話を通して、地震・津波に対する知識を深め、防災に対する取組や対策について理解することができた。
- (2) 小学校の授業では、避難訓練等での指導の定着もあり、「災害への備え」はそれぞれの場面に合った知識の理解ができた。中学校の授業では、生徒の視点をもとに自助・共助について考えさせ、授業後の避難訓練の中で生徒自身が避難経路の危険度などを確認できた。
- (3) 「学校防災の日」を設定したことで大地震を忘れない工夫ができた。また、合同避難訓練の理解が進み、本研究所と学校防災主任会との連携が密になった。
- (4) 「ふるさと学習通信」の発行によって、地震・津波についての理解や家族防災会議への意欲が高まった。また、アンケート調査の結果から児童生徒、教職員の考え方を理解できた。

2 今後の課題

- (1) 防災教育は、学校・家庭・地域・関係機関の連携を図る中で進め、防災に対する環境や施設の整備も望みたい。防災教育のカリキュラムや避難訓練の仕方、地域への啓発や関係機関との連携などで進んでいる地域や学校の研修などで防災教育の充実を図る必要がある。
- (2) 地震・津波等に関する授業の指導は、専門的な知識も備えながら児童生徒の興味関心を高めたい。次年度以降は、授業を行う上で他教科との関連も考慮する必要がある。
- (3) 防災につながる行動力を育てることは、知識の実践化と習慣化を養うことにある。また、自分の家庭の状況に当てはめて実践できるかを確認させることも必要である。
- (4) アンケート調査や家族防災会議の励めについては、継続していくことが必要である。具体的にはどの時期にどのような指導や働きかけをするかについて整理できるとよい。

○ 引用・参考文献

- | | |
|----------------------------|-------------|
| ・ 学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き | 文部科学省 |
| ・ 学校防災マニュアル（地震津波災害）作成例 | 岡山県教育委員会 |
| ・ 津波災害に伴う安全対策マニュアル指針 | 宮崎県教育庁学校政策課 |
| ・ 釜石市津波防災教育のための手引き | 岩手県釜石市教育委員会 |
| ・ ～みやざきっ子の命を守る～宮崎市防災教育手引書 | 宮崎市教育委員会 |
| ・ かどがわ黒潮学習のてびき | 門川町教育委員会 |
| ・ 高鍋町立学校防災マニュアル（地震津波災害）作成例 | 高鍋町教育委員会 |
| ・ 高知市地震・津波防災教育の手引き | 高知市教育委員会 |
| ・ 宮崎県防災教育資料集 | 宮崎県教育委員会 |
| ・ みんなの防災手帳 | 高鍋町役場総務課 |
| ・ 高鍋町津波ハザードマップ | 高鍋町役場総務課 |

○ 研究同人

- | | | | | | | | |
|-------|-------|--------------|-------|--------------|--|--|--|
| 所長 | 島埜内 遵 | | | | | | |
| 研究指導員 | 幸丸 義信 | | | | | | |
| 研究員 | 林 孝行 | 安田 沙世 (高鍋東小) | 篠田 岳彦 | 黒木 貴光 (高鍋西小) | | | |
| | 満安 辰郎 | 兒玉 径 (高鍋東中) | 長池 徳夫 | 橋口 俊幸 (高鍋西中) | | | |